

靈宝館だより

題字・畚野光義師



現在の琳賢廟堂と根本大塔 関連記事は10頁

靈宝館だより 第104号

平成24年9月14日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
(財)高野山文化財保存会
高野山靈宝館
電話0736-56-2029
URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

開館時間	5月1日～10月31日 8時30分～17時30分 11月1日～4月30日 8時30分～17時00分
休館日	年末年始のみ
拝観料	大人 600円 高・大学生 350円 小・中学生 250円 高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。 専用駐車場あり

秋の展覧会
**「天皇の靈宝
 - 王朝が見た高野山 -」**
 9月29日(土)～12月16日(日)
 関西文化の日に協賛し、11月12日(月)
 を無料拝観日といたします

第104号 目次

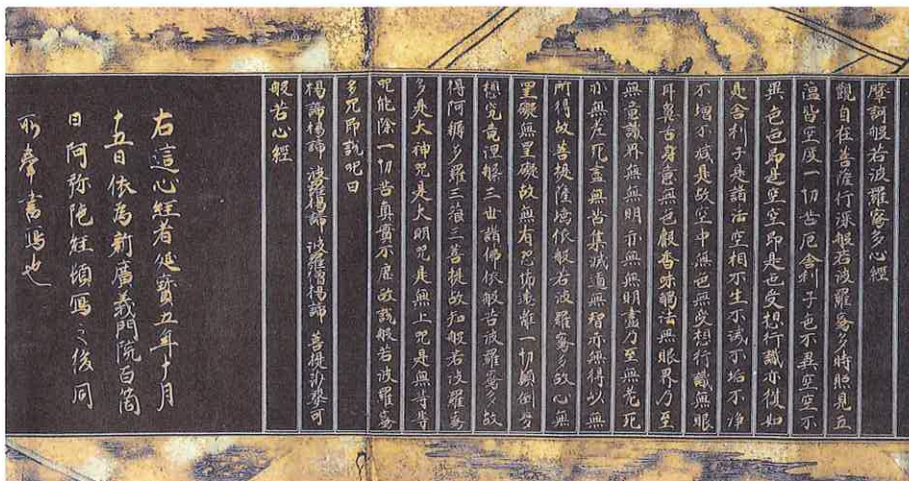
秋の展覧会のご案内	2～3
第7回もみじ祭のお知らせ	4
特別公開・新製品のご案内	5
収蔵品の紹介78	6
高野山の古建築 第八回	7
地域文化における寺のあり方	8～9
よもやま話 vol.25	10～11
梵音具の世界その二「錫杖」	11
靈宝館の庭園	12

毎月21日(弘法大師の日)ご来館の方にプレゼントあり！ ホームページ割引券もご利用ください

平成24年度 秋の展覧会

「天皇の靈宝——王朝が見た高野山——」

期間 9月29日(土)～12月16日(日)



重文 靈元天皇宸翰 紺紙金字般若心經 (金剛峯寺)



桜町天皇冠 (金剛峯寺)



昭和天皇宸翰 根本大塔勅額「弘法」 (金剛峯寺)

高野山は修禪の地として、弘仁七年（八一六）嵯峨天皇の勅許をもって開かれました。天皇は、時に国家の安泰を祈る宗教家、時に政治を行う為政者、時に文化を牽引した文化人でもありました。開創以来高野山は、天皇・皇族からも信仰を集め、数多くの宝物が納められました。

展覧会のみどころをいくつか紹介しましょう。まずは、「重文 十一面観音立像（宝亀院）」です。本像は、嵯峨天皇の念持仏だった可能性があります。日本の仏像にはない特徴がいくつもあり、平安時代前期（九世紀）に作られた仏像で、高野山内に現存する仏像の中では最古級です。今まで注目されることはありませんでしたが、「隠れた名品」といえるとても優れた御像です。

本展では、天皇直筆の書が多数出陳されるのも大きな見所の一つです。天皇直筆の書は「宸翰」と呼ばれ、特別な存在として扱われています。天皇は書だけでなく、和詩歌や絵画などもたしなみました。つまり、芸術家としての一面も持っていたのです。世界史に登場する皇帝や王は、芸術を庇護する立場（パトロン）であることがほとんどですが、自らが芸術家でもあったことはごく稀です。しかし、歴代天皇のほとんどが教養として芸術をたしなんでいます。このことだけを見ても、日本の天皇が特異な存在であったことがお分かり頂けるかと思えます。

その他、本展覧会では天皇の冠や調度品など、初出陳の品々も展示します。日常の調度品の中にも思わず感嘆するような贅を尽くした品々があり、繊細な技法にも目を凝らしてください。

天皇と高野山は歴史の中で、宗教、文化、時には政治の面で影響し合い、時代の波にも翻弄されました。その中で天皇と王朝が高野山に見たものは何だったのでしょうか。



刻彫黄楊水晶玉飾台〈明治天皇后賜品〉(金剛峯寺)
台座高22.0cm



重文 如意輪観音坐像(如意輪寺)
像高54.3cm



重文 十一面観音立像(宝亀院)
像高57.5cm

主な出陳品

彫刻

重文 十一面観音立像
重文 如意輪観音坐像

馬頭観音立像(丁RA調教師小野留嘉旧蔵)

宝亀院
如意輪寺
靈宝館

書跡

重文 後小松天皇宸翰 秘調伝授書
重文 靈元天皇宸翰 紺紙金字般若心経
重文 金剛峯寺根本縁起後醍醐天皇御手印縁起並跋
昭和天皇宸翰 根本大塔勅額「弘法」

西南院
金剛峯寺
金剛峯寺
金剛峯寺

絵画

嵯峨天皇像
十二天像
後水尾院像
孔雀経曼荼羅図

金剛峯寺
成慶院
金剛峯寺
竜光院

工芸

歴代天皇冠(桜町・桃園・光格・孝明)
靈元天皇手箱・楊枝入
岸上遊亀形筆架*・水遊おしどり形文鎮(大正天皇后賜品)
刻彫黄楊水晶玉飾台(明治天皇后賜品)

金剛峯寺
金剛峯寺
金剛峯寺
金剛峯寺

全41件を展示。うち国宝1件、重要文化財5件。

※「岸上遊亀形筆架」について、本誌6ページで紹介しています。

ミュージアムトーク(展示解説)

10月13日(土) 午前10時30分〜11時30分
10月20日(土) 午後2時〜3時
事前申込不要。(但し拝観料が必要)

第7回高野山霊宝館もみじ祭のお知らせ

■フォトコンテスト

テーマ

「伝えたい、高野山の一枚」

応募期間

平成24年11月1日(木)～

11月30日(金)

当日消印有効

応募要項

① A4版(21×29・7cm)にプリントされた作品。(プリント紙の種類は問いません)

② 撮影場所とその写真に関するコメントを二百字程度で添えてください。

③ 作品の裏面に天地がわかるように上端に「上」と記載し、住所、氏名を明記してください。(電話番号、年齢は任意)

④ 応募者一名につき、一点の応募。

▼ 迎賓館(当館敷地内)での無料イベント ▼



はせがわちこう 長谷川智弘作品展 結びの世界「みやび」

日本の結びは仏教とともに伝わり、発展してきました。堂内を荘厳する華鬘結びや、僧侶の袈裟に用いる修多羅の結びなどは、目にされたこともあると思います。色とりどりの紐を「結ぶ」ことで作り出される複雑で美しい形の

数々をぜひご覧ください。

〈日時〉10月1日(月)～10月7日(日)

午前10時～午後5時

霊宝館長講演会

「嵯峨天皇と弘法大師」と題し、静慈圓館長が講演します。

〈日時〉10月13日(土) 午後2時～3時

定員40名。電話予約可。

秋の茶会と書道展

霊宝館の展示をご覧いただいた方を対象に、高野山大学茶道部の部員が抹



茶のお接待を行います。あわせて、書道部の書道作品も展示します。

〈日時〉10月20日(土)・21日(日)

午前10時～午後4時

抹茶のお接待を希望される方は、霊宝館窓口でチケット購入の際にお申し出ください。

※茶会はお菓子が無くなり次第、終了いたします。

土曜講座「天皇と仏像」

当館学芸員による、秋の展覧会講座。

〈日時〉11月3日(土) 午後2時～3時

定員40名。電話予約可。

特別公開

報告―国宝・不動堂を一日限定で公開

通常非公開の不動堂の内部を、8月21日(火)のみ試験的に公開しました。

当日は五百名ほどの見学者があり、高野山の文化財(建造物)について、理解を深めていただきました。



※不動堂および徳川家霊台について、詳しくは本誌連載中「高野山の古建築」をご覧ください。
(不動堂：第98号〜第101号、徳川家霊台：第102号)。バックナンバーは当館HPで公開中)

重要文化財・徳川家霊台を公開



家康霊屋の全景

〔日時〕11月1日(木)〜7日(水)

11月22日(木)〜25日(日)

午前9時30分〜午後4時

〔拝観料〕二〇〇円

徳川家霊台を、期間限定で開扉します。寛永二十年(一六四三)に完成した徳川家霊台は、江戸時代前期を代表する建築です。徳川初代將軍家康と、二代將軍秀忠を祀る二棟の霊屋で、「東の日光東照宮、西の高野山徳川家霊台」ともいえるほどの造形美は必見です。技術の粋を尽くした彫刻や蒔絵、飾り金具の数々も見所のひとつです。

新製品ののご案内

手漉高野紙謹製

「バッグインケース」

「高野紙」は、古来高野山に伝えられた紙で、弘法大師がその製法を伝えたとされています。お経の印刷や奉書にも多く使われ、法衣にも使われた丈夫な紙です。

昔は盛んだった高野紙作りも一度は途絶えてしまいましたが、現在若い職人が伝統技法を伝えようと、少しずつ活動しています。

霊宝館でも伝統技術継承のお手伝いを出さないかと、高野紙を使った「バッグインケース」を作りました。紙漉き職人のこだわりがたくさん詰まった製品です。切符や通帳、カード、お札入れなど用途は様々。旅行のお供にバッグに一つ入れておくと、とても重宝します。当館限定少量生産ですので、お早めに！



収蔵品の紹介 78



ニホンイシガメ (筆者飼育)



腹側

岸上遊亀形筆架がんにじょうゆうきがたひつつか 一基

全長12・0 cm 高4・5 cm 銅製

金剛峯寺 明治時代

紹美栄祐作

本品は筆架といつて、硯すずりのそばに置いて筆を乗せる道具です。おしどり形文鎮二個と共に一つの箱に収められています。

スッポンくらいだったようです。

三匹の小亀がそれぞれの背中に手を置いた姿で、三匹はくっつき、一体となつて離すことができません。これを見ると多くの人がそのリアルな造形に驚くかと思えます。甲羅一枚一枚の成長線やシワ、手足や尾の鱗うろこなど、本物と見間違ふほど精巧に作られています。腹側も全く手を抜かず、総排泄孔そうはいせつこう(お尻の穴)まできちんと表されています。これはニホンイシガメで、平たく後縁部がギザギザした甲羅、水かきのついた大きな手足など、その特徴をよく表しています。

この筆架の作者は紹美栄祐(一八三九〜一九〇〇)という金属工芸家で、パリ万博など国内外の博覧会に出品し、高い評価を得ました。明治時代の工芸品は非常に緻密ちみかで、過剰ともいえる装飾が特徴です。これは日本の高度な技術を世界にアピールするという目的もあり、近代化・国際化への扉が開いたという時代背景もあらわれています。一時は忘れられていましたが、近年、明治の工芸品への再評価の気運が高まっています。

余談ですが、日本では江戸時代頃までカメの絵といえばニホンイシガメを描いたものがほとんどです。池や川でよく見かけるミドリガメ(ミシシッピアカミミガメ)は昭和期に北米から、クサガメも江戸時代末期に大陸から移入された外来種です。そのため当時身近なところで見かけるのは、ニホンイシガメと

本品の箱書によると明治三十三年(一九〇〇)、御慶事献納品として大正天皇御物となり、大正二年(一九一三)に高野山に下賜されました。大正天皇は明治三十三年五月十日、九条節子(のちの貞明皇后)とご結婚され、そのお祝いとして献上されたとみられます。紹美はその一ヵ月後の六月十一日に亡くなつており、最晩年の、持てる技術の限りを尽くした作品なのかもしれません。

けるのは、ニホンイシガメと

(F)

連載

高野山の古建築

第八回 重要文化財 徳川家霊台 (三)

鳴海 祥博



秀忠霊屋の内部 柱や長押、組物は鮮やかな彩色に彩られている。天井は黒漆に金箔貼りで、金色の飾り金具を打つ。



家康霊屋の内部 中央に須弥壇と厨子が安置されている。豪華絢爛の粋を尽くし、金色に輝いている。



厨子扉の詳細 蒔絵の技法を駆使して、三つ葉葵の葉は右は1枚、左は2枚が裏葉に描かれている。



厨子の詳細 柱の直径は7.5cm。写真に写っている部分の幅は約1.1m。総ての部材に漆、蒔絵、飾り金具が施されている。



須弥壇飾り金具の詳細 金具にはすべて異なった文様を打ち出している。中でも唐松の打ち出しは精緻を極め、そこには小宇宙を見る思いがする。



須弥壇の詳細 蒔絵と飾り金具で豪華に裝飾される。部分的に用いた朱漆がアクセントとなっている。

徳川家霊台の内部を拝見しましょう。堂内に一歩足を踏み入れると、そこは五色に彩られ金色に輝く別世界です。

金箔貼りの壁面には家康霊屋では鷹、秀忠霊屋では獅子が描かれています。家康は武士の嗜みとして鷹狩りを大いに好んだと伝えられており、それに因んだ鷹図。秀忠は卯年生まれなので、守り本尊の文殊菩薩に因んで、文殊菩薩の乗る獅子の図が描かれているように思われます。

柱や長押、組物は文様彩色で埋め尽くされています。特に七宝繋ぎの連続文様が華やかさを引き立たせています。その連続する小さな文様の縁取りに金を使っているところが特色で、彩色全体が金色に輝いて見えます。しかも金の縁取り部分は高く盛り上げて立体感を出す「置き上げ」という技法が用いられています。

天井は折上げ小組格天井で黒漆塗り、小組の裏板は金箔貼り、格縁の交差部分はにはすべて飾り金具が打たれ、全面が黒と金色の世界です。

堂内の奥中央には須弥壇が置かれ、その上に幅1m程の厨子が安置されています。この須弥壇と厨子は黒漆塗りで所狭しと金蒔絵が施され、大量の飾り金具が打ち付けられています。これほど濃密に蒔絵と飾り金具で覆われた須弥壇と厨子は他に例がない、と言っても過言ではありません。

高野山の文化

地域文化における寺のあり方

九度山町日輪寺周辺地域の正月行事

前高野山大学教授 日野西 眞定

九度山町は高野山麓にあり、高野山とは大変に関係が深い。私は、平成十六年に九度山町が出版した『改訂九度山町史 民俗・文化財編』の編集委員長となり、十年間程かけて完成させた。「改訂」とあるのは、旧町史は一度出版されているが、その頃は「民俗学」が進んでいなかったため、新しく出版し直されることになったのだと記憶している。

編集委員の一人に、九度山町河根地区にある日輪寺（高野山真言宗）住職徳谷光昭師も任命されていた。日輪寺をたびたび訪れるうち、この地域文化に対する同寺および住職の位置づけについて深く感じたことがあるので、今回はこれを紹介したい。

日輪寺の境内には丹生神社もあるが、明治時代まで神主は存在せず、日輪寺の管轄下にあり、神社の行事も日輪寺住職が行っていた。そればかりではなく、近くの河根地区などには、堂

が数カ所存在していたが、そこにも日輪寺住職が行き、行事を行っていた。つまり、日輪寺は、九度山町河根地区における文化・信仰の中心であった。

正月の行事も、日輪寺に村役員等が集まって行う。古くは、正月一日に「朝拝」があり、五日には「荘厳」と称される「おこない」があったが、現在では「荘厳朝拝」と呼ばれ、

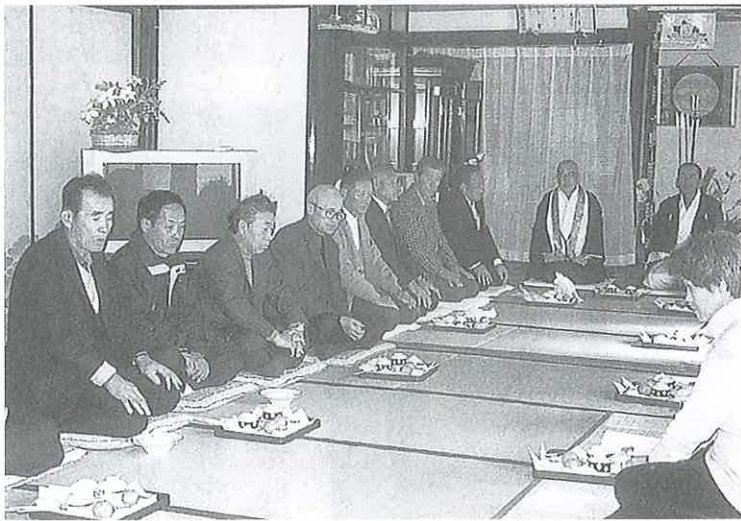
両日の行事をあわせて正月

一日に行っている。その他の主な行事は、丹生神社での元旦祭、直会（会合）、昨年生まれた子の氏子入りの行事で、翌二日には弓引きが行われる。なお、丹生神社の参加は、明治時代以後のことで、国家的神道を重んずる明治政府の方針に従ったものであろう。

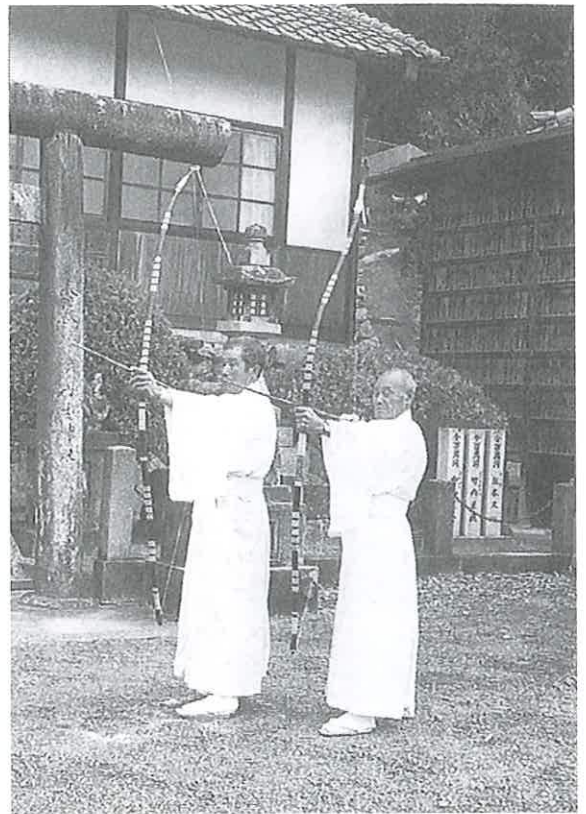
元旦祭はいわゆる神道式な祭典で、丹生神社に氏子総代・耆老会員・区長・地区の班長・弓引き・氏子入りする子の親らが参列して、神饌を捧げ、神主が祝詞を

奏上した後、神楽舞が奉納される。巫女四人が横に並び、鈴を振りながらゆつくりと回るだけの素朴な舞である。続いて少女四人による浦安舞が行われて神社の祭典が終了し、直会となる。

直会は、日輪寺の座敷で行われる。正面に住職が座り、その横に現在では神主も座っている。耆老会員、区長・巫女・班長・弓引きらが左右に並び、座役（現在は前年に入座した人）と氏子入りする子の親達は座末にひかえて座る。座役や氏子入りする子の親の挨拶の後、二日の丹生神社前で弓引きをするものに弓が預けられ、氏子総代の音頭で乾杯、氏子入りの子の親から「豆」と「飾り膳」が配られ、神酒が注がれる。「豆」は、塩煮にした大豆を三方に盛り、中央に、半紙で巻き水引をかけた牛蒡が飾られている。「飾り膳」は平膳に半紙を敷き、小餅・みかん・栗・干し柿を一膳に二人分載せ



河根の荘厳朝拝



河根の弓引き

て出す。各人が一献ずつ杯を傾けたあと、副座役の挨拶で閉会となり、地区の班長から各家にお宮のお下がりとして、小餅一個ずつが配られる。

弓引きは、翌二月二日に丹生神社で行われる。邪悪なものを討つための行事である。これも古くは一月四日であった。文政七年（一八二四）に記され、天保十年（一八三九）に書き写されたといわれる『耆老会年中行事記録』（河根丹生神社所蔵）には、「同じく四日弓始めの儀」とあり、弓についても、「四日之式日相勤候上、五日の惣席へ持参仕、明年の当番へ相渡し、是を弓渡しと申し伝ふる也」とある。現在は弓を引くのは、座衆の中から十五名の

大長老を除いた座員の年長の者順に二名で、弓引きをすますと大長老になる資格が得られる。弓引きに当たった者は、正月一日に預かった弓を床の間に置き、矢は各自が細い竹で作る。午前九時から丹生神社の祓殿で修祓（お祓い）を受け、鳥居の前で「明けの方」に向かって大声で「悪魔退散」と唱えて弓を引く。引く順番は決まっていなが、一人一本ずつ射る。江戸時代には的を射たようで、『耆老会年中行事記録』には、「的の仕様は、五尺二寸（約一m五十八cm）なり、三方に二十七の弊を結び付け」たものを用いたとある。現在は、その的がないので、どこに飛ぶか分からないが、矢を拾った人は、持ち帰って神棚や床の間に祀っておく。魔除けになるといえるが、かつては

大勢の希望者があり取り合ったそうである。

なお現在、日輪寺では、住職が「莊嚴朝拜」とは別に、一月一日の午前零時から大般若経の転読を行い、三日の朝、河根地区の檀家一軒ずつにその祈禱札を配り、その他の地区の檀家には、各区長に配ってもらっていた。これは、徳谷光昭師が始めたことである。

次に、九度山町北又の久保地区も日輪寺檀家なので、一月八日に同所薬師堂（本尊薬師如来）で行われる行事について述べる。住民は、般若心経を読誦し、ついで薬師如来の真言、光明真言、大師宝号等を唱え終わると、半紙に牛玉宝印の印をつく。印肉は一年間使用せず固まっているので、酒を混ぜて軟らかくして使っている。牛玉宝印をついた半紙は、一軒につき四枚ずつ配る。一枚目には八つ、二枚目には九つ、三枚目には四つ、四枚目には五つ捺すことになっている。年行司という当番役は、八十cmほどの漆の木を皮いで持って来て「福杖」と呼ばれる杖を作る。この杖の先を鎌のようなもので割り、そこにこの紙の札を挟んで家に持ち帰り、床の間などに置いておき、田に苗代を植える時、水口に立てる。水口にはまた、色紙でツツジに似たものを作り、これを生け花と見立てて、

神と共に立てる。この牛玉宝印を捺した紙の枚数は、この地区独自のもので、長い伝統の中の一つの間にか生まれたことと思える。この苗代の水口にツツジの花を立てる例は全国的に多く見られることである。

また、九度山東郷地区では、一月五日、各家で漆かハゼの木の枝で杖を作り、同所にあるお寺（東光院）に牛玉宝印のお札をもらいに行き、杖の先を鎌などで割り、そこに挟んで持ち帰った。牛玉宝印の札は、正月に寺などから出される札としては最も多かったが、ここでも寺側で準備してくれていた。いただいた牛玉杖や牛玉札は成木責めに用いた。成木責めとは、果物が成る木の幹を豊作の願いを込めてたたくことである。またこれを田植の時に水口に立てるのも、豊作を祈る為であろう。

私は長々と、九度山町内の正月の行事について書いたが、特に河根地区においては日輪寺が存在し、その地区の行事の中心になっていたことを知ってほしいためである。明治以後町村制になった今でも同じようにこの地区は、日輪寺が中心となって、これだけ豊かな行事を継続しているのである。

寺は、その地区の文化の中核になっている。そしてこれが本来の存在であると思ひ、日輪寺の活躍を紹介させてもらった次第である。

琳賢さん往生して舍利となる



琳賢阿闍梨像（像高38.0cm）宝城院
琳賢（1074～1150）紀州那賀郡神崎の生まれ。最初東大寺にて華嚴を修め、その後高野山に登る。保延5年（1139）高野山第19世檢校となる。

平安時代も後期の頃、伽藍根本大塔に雷が落ちて出火し、金堂、灌頂院、三昧堂などを類焼したのは久安五年（一一四九）五月十二日のことでした。このときの高野山檢校は円如房琳賢という方で、琳賢さんは伽藍焼失の責任をとって職を辞することになり、翌年の八月十四日、七十七歳で入寂（亡くなること）されます。今回は、琳賢さんについての不思議なお話です。

琳賢さんの時代の高野山は、高野



伝・弥勒院廟窟跡灯籠（宝城院中庭）
琳賢さんの全身舍利を安置した廟窟（堂）があったとされる場所で、現在は石灯籠のみが残っています。灯籠には「常夜燈一基 琳賢大徳御宝 弥勒院住持 宝曆八戌寅年（1758）八月十四日建立」とあります。しかし、廟窟のあった場所の特定されておらず、詳細は不明です。

琳賢さんは臨終に際して、弥勒像を安置し、五色の糸をつないで往生されたことが、『高野山往生伝』という書物に記されています。また他の数種類の伝記資料からは、往生後に「全身舍利」となったことが伝え

山自体が浄土であるとする信仰などを背景に、前関白期に続き白河・鳥羽兩上皇など、貴顕の登山参詣があいついでおり、それに伴って、多くの堂舎が整備されました。琳賢さん自身も、楼門としては最初である大門の造営をはじめとして、伽藍中門を金堂前から階段下の現在の位置に移築し、その落慶導師を務めるなど、多方面において尽力されたことが記録されています。



近年に建て替えられた現在の琳賢廟堂（手前左）宝城院
現在、琳賢さんの廟堂は、廟窟跡や宝城院本堂と相対する西側の山腹に建立されています。

られています。

舍利とはご存じの通り人骨のことで、ちなみに仏舍利とはお釈迦さまの身骨を意味します。『仏教大辞典』によりますと、全身舍利とは「埋葬した遺体」とあります。しかしそれでは琳賢さんの場合には意味が通じ

ませんので、ここでは朽ちない遺体、今でいう「ミイラ（即身仏）」として解釈しておきたいと思えます。

琳賢さんの全身舍利は、住房のあった弥勒院裏山の廟窟（廟堂とも）に安置されたと伝えられています。そして、五十七年後の承元元年（一一〇七）、後鳥羽上皇が高野山に参詣されたことで、この伝説のクライマックスがおとずれます。

全身舍利となった琳賢さんの話をお聞きになった上皇が、廟窟の扉を開かれました。そして舍利に向かつて、「どうして末世に利益をのこさないのか」と仰ったのだそうです。その瞬間、琳賢さんの左眼がポロリと転がり落ち、しかもその眼からは、まばゆいばかりの光明が放たれました。往生者の霊験と瑞相（め



琳賢左眼之舍利塔（総高55・0cm）宝城院

高野山絵図(部分)
正保3年(1646)
伽藍北側に位置する弥勒院と宝城院の配置を示しており、明治時代まで変更はありませんでした。両寺院共に開基は琳賢さんとなっています。
①は現在の廟堂の位置で、②は廟窟跡灯籠の位置となります。



でたいしるし)を目の当たりにされた上皇やお付きの方々は、琳賢さんを大いに嗟嘆恭敬(感心して褒め、つつしみ敬うこと)することになりました。この時落ちた左眼は、「肉眼舍利」、「琳賢左眼之舍利」などと呼ばれ、弥勒院の寺域を明治になって合併した宝城院の寺宝として、今に伝わっています。

以上の伝説からは、院政期における高野浄土観や弥勒信仰の一端がうかがえ、さらに、往生者に対して利益を求める信仰があったことも見逃せません。(M)

梵

音具

の

世界

その二

「錫杖」

錫杖とは、通常木製(まれに鉄製の杖の頭部に、金属製の装飾をつけ、小さな鏝(遊鏝)を複数通したもの。僧侶が持つべき十八アイテム(比丘十八物)の一つで、杖としての用途のほか、頭部を振って音を出すことにより、托鉢の到来を知らせたり、野山のけものや蛇を避けたりします。錫杖の扱い方については、「両肩にかけて両端を宙に浮かしてはならない」「手にして横に振ってはならない」等、経典に細かく規定されています。

◇

錫杖の柄を短くしたものを「手錫杖」といいます。日本で発達したよう、杖としての用途よりも、音具の役割が主になります。振り方としては、右手にもち、はじめにシャン・シャン・シャンと三回強く振った後、さらさらさら…と徐々に早く弱く振って止めます。これを「一振」とし、「次第」(修法の順序を記したものに「三振」と書いてあれ

ば、三回繰り返します。

◇

錫杖を振って唱える梵唄に「三條錫杖」と、「九條錫杖」があります。それぞれ三節と、九節に分かれており、各節の終わりごとに錫杖を振ります。

「三條錫杖」は、「九條錫杖」のはじめと終わりの部分をつなげたかたちになっていますが、文言が一部異なります。また「九條錫杖」の中には、「苦しみを受けている衆生が、錫杖の音を聞いて、速やかに解脱を得、…菩提心を発し悟りを得ます

ように」という意味の文言があり、錫杖の音そのものが、解脱への機縁とされています。

◇

高野山では、毎年元旦から三日間、伽藍金堂にて行われる「修正会」や、二月十四日から十五日にかけて金剛峯寺大広間で行われる「常楽会」など、頭教の様式に則った法会の際に、「三條錫杖」を唱えます。また、山内寺院の住職の葬儀においても、手錫杖が使われます。



▲白銅手錫杖(和歌山県指定文化財、金剛峯寺)長32.0cm

◀頭部

◇

当館収蔵品の中に、「白銅手錫杖」(和歌山県指定)があります。頭部は白銅製で、表裏とも、柄の先に如来形の三尊像を配しています。中尊の光背からは相輪が延びて外側の輪と接合し、その延長上にはさらに宝珠を置いています。遊鏝は三輪残のみですが、もとはおそらく六輪あったと思われます。小ぶりで細身の作りをしており、手に取ってみると、その軽さに驚くほどです。

いにしえの人は、どのような思いを込めてこの手錫杖を振り、その音を聞いたのでしょうか。(N)

霊宝館の庭園

クサギ・臭木・臭木菜・ぼうずぐさ

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

クサギはクマツヅラ科・クサギ属の落葉低木。高野山塊では山麓部から摩尼山など山頂部にかけて自生しているものを見(観)ることができ

ます。クサギ属には諸々の薬効のあるものや劇毒成分をもつ樹種もあり、それらの使用によって、人の運命を左右するということから、この属には「運命の樹」という意味の世界共通の学名がつけられています。

クサギという種の和名は、この木の葉を裂いたり、枝を折るなどすると、独特の臭気があることにより、臭木の字が慣用されています。

春から初夏にかけての若芽・若葉を摘み採り湯がいて、しばらく水で晒したものや、それを乾燥させて蓄え、調理の都度、水に浸してもどし、大豆などと混ぜ、煮物にして食べたことによる、くさぎな(臭木菜)、くさな(臭菜)などの呼び名も遺っています。この煮物を盂蘭盆に先祖の精霊への、ご馳走の一品としたという地方地域もあるそうです。



春から初夏の若芽若葉



夏の花冠と萼



秋の果実と宿存萼

四国の西部の山村では、くじゅうな、と呼んでいました。食材とする生葉は、かなりあく(灰汁)が強くて煮物にも少し苦味があります。くじゅうな、は苦汁菜であろうと気づいたのは、ずっと後のことです。夏は、野生の樹の花の少ない季節、先々に専門用語では集散花序という配列で群れ咲きます。花冠と萼の形

態や色合い(色調)に特徴があります。ササユリなどに劣らない香りがあり、臭木の花は芳香の花です。心身の癒やしにも。秋の、紫青色(藍色・碧色)で光沢のある球形の果実の基部に、星形に五つに深裂した赤い宿存萼(果実が成熟した後も落ちないで残る性質をもつ萼)が、平開または反り返ってつき従う様は、形状・色彩ともに

美しくて人目をひき、それを、てるてる坊主や、こぼんさんに見立てての命名かと思われる、ぼうずぐさ(往時は、〇〇ぐさ、〇〇ぐさと呼ばれていた樹の例は少なくない)、ぼんさん、などの方言名もあります。この熟した果実は古くから水色や青色染色材として、特に糸染めに用いられてきたといわれています。